
東方迷繫記

赤鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方迷繫記

【Nコード】

N7809X

【作者名】

赤鈴

【あらすじ】

ある日、俺の平穏な日常が崩れ去り、俺はある世界に迷い込む。

そこは、人間や妖怪が共存する世界、『幻想郷』だった……。

さまざまな異変が起こるこの世界で、俺は生き延びれるのか……？

迷い込んだ少年（前書き）

ども、赤鈴といます。

前書きからこんな事暴露するのもアレですが、第一話には東方キヤラが一人も出てきません。本当にごめんなさい……………。

途中から文章が崩壊していきます。

迷い込んだ少年

土の上に落ちた小枝や落ち葉を踏む音が耳に響く。

辺りは闇に包まれていて、夜空に輝く月の光だけが道なき道を照らしている。

「・・・疲れた・・・」

もう、かれこれ数時間はこうして歩いているだろう。着ているTシャツは大量に掻いた汗で濡れていて、体に貼り付いて気持ちが悪い。おまけに、蒸し暑い気温が体力消耗に追い討ちをかける。

「はあ・・・」

足を止め、すぐそばの木に背中を預けてそのままへたり込んだ。

少し長めの髪の毛の先に汗が溜まり、雫となってTシャツの上に落ちる。

ふと、右手に握っている木刀の剣先が視界に入った。

色はやや黒く、鏢の付いていないよくある普通の木刀だ。剣先にこびりついたどす黒いものを除けばの話だが・・・。

その木刀の剣先を、土にこすり付けた。こびりついた黒を消すために。

(・・・なんでこんなことになってんだろ・・・)

はあ、とため息をついてゆっくりとまぶたを閉じた。

時刻は真夜中、現在地は山の中ということ以外は不明。

閉じたまぶたの裏に、ここに至るまでの経緯が少しずつ映し出されるのと同時に、こんなアバウトな説明しかできない自分に心の中で苦笑した。

……夕方。スクールザックを背負い、格好も手に持つ物も様々な生徒達が帰路に就いている。話し声や笑い声が所々から聞こえ、友人から挨拶を受ければ俺も挨拶を返す。そう、いつもと同じ。何も変わらない、いつも通りの夕方。ただ、俺の手元にもいつもとは違い、竹刀袋に入った木刀があるだけ。剣道部の後輩に木刀の形を指導するために家から持ってきていた木刀を、家に持って帰るために。そう……、ただ、違いはそれだけだった……。

帰り道の途中、薄暗い路地のほうから複数の笑い声と、それに混じった小さな悲鳴が聞こえた。

何事かと思い、路地の奥へ足を進めると、二十代ほどの男が四人と、その男たちに囲まれている女の子が一人。

男達は、いずれも髪の毛を茶や金に染めており、見た目はいかにもガラが悪そうだ。

囲まれている女の子は、涙目になって怯えている。俺が背負っているスクールザックと同じものを背負っているということは、俺と同じ学校の生徒なのだろう。

「誰？こいつ。知り合い？」

「知らねえよ。通りかかったただけだろ」

「見られちゃったじゃん。どうすんの？」

「『帰宅途中の中学生、強姦目撃！？』ってか？」

俺の存在に気づいた男たちがギャハハ、と下品な笑い声を上げる。
ああ、一体どうしたらいいのだろう。ここで女の子を見捨てるという選択肢は、自分の身を守るのには一番適しているはずだが、なんだか人としてアレな気がするし、何より後味が悪い。
もう、自棄だ。

「あの・・・、嫌がつてるっばいんで、やめてあげてくれないですかねえ・・・」

絶対に聞き入れてくれないと分かってはいるが、一応言ってみた。そして、それを聞いた男たちが再び笑った。

「ねえ、なんか言っただけどどうする？」

「まさか、そのまま帰すわけじゃねえだろ」

「あ、テキトーにいじめて俺たちのお財布になってもらおうか」

「あー、それ賛成」

俺をどうするかが決まったらしく、男の一人が俺の右肩を掴んで建物の壁に押し付けた。

おまけに、男はポケットからカッターナイフを取り出し、俺の顔面に刃を向けた。

「ごめんねえボクウ。ま、恨むんなら見ちゃった自分を恨んでよ」

男はニヤニヤと笑いながら、カッターナイフの刃の先を俺の頬にプスリと刺した。

どうしてこの男たちは俺のことを笑っているのだろう。

どうしてこの男たちは女の子を怯えさせるようなことをしているのだろう。

どうしてこの男たちはこうも下品に笑えるのだろう。

自分にいくら問いかけても答えが出てこない。

そんな俺の心は、男たちに対する憎しみか、それ以外の何かなのか、正体の分からない黒いものに蝕まれていった。

まるで自分が自分でなくなっていくように。

気づいたとき、俺を壁に押し付けていた男が驚愕に目を見開いていた。

なんでこんな表情をしているんだろう？不思議に思っただけで男の視線の先を見ると、そこにはカッターナイフの刃を握り締められている俺の左手があつた。

血が流れているのに、痛みを感じない。そんな俺の手を見て男は後ずさった。

けれどもカッターナイフの刃は手から離れることなく、俺は引き寄せられるように一歩出た。

そして俺の右手には、いつの間にか竹刀袋から抜き放たれていた黒い木刀が握られていた。

無意識のうちに、俺は木刀を頭上に構え、男に向かって振り下ろした。

次に気がついたとき、男たちは全員、頭から血を流して地面に倒れていた。

地面に倒れている男たちと、俺が右手に握っている木刀の剣先が赤く染まっていることから、全ての状況を把握した。

女の子は変わらず怯えていた。が、恐らく今の恐怖の対象は俺だろう。それを証明するかのように、俺が声をかけようとしたら一目散に逃げてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！！！」

少しの間が空き、自分が何をしてしまったのかがやっと理解できた。

人を殴った……自らの身の危険を感じたとはいえ……！
周りのもの全てが自分の敵に見え、感じたことの無い恐怖が頭の中
を埋め尽くす。

「う……う……あ……」
逃げるように、その場を立ち去った。

自宅に到着し、鍵を開けて中に入ってすぐに、背負っていたザック
を放り投げ、返り血がついた制服を脱ぎ捨てた。
人通りの少ない道を選んで帰ってきたため、返り血を浴びた自分の
姿を人に見られることはなかった。

「ハア……ハア……」
自分の部屋に入り、洋服棚から服を二枚引っ張り出して着る。真っ
白な無地の半袖Tシャツと、七分丈のスボン。どちらの服も俺が着
慣れているものだった。

半ば放心状態で家の中をふらついていると、洗面台の鏡に俺が映っ
た。

鏡に映った俺の顔には返り血と思われるものが数滴付いている。

「……ッ！」

手近にあったタオルを水で濡らし、乱暴に顔を拭く。

タオルを顔から遠ざけ、もう一度自分の顔を鏡で見る。

自分の顔を見て、自分が犯した罪を思い出した。

「人を木刀で殴った」

「う……う……」

二、三步後ずさり、そのまま玄関へ走っていく。

乱暴に扉を開け、そのままどこかへ走り出す。なぜか、右手には黒
い木刀を握り締めて……。

（俺は……どこへ行くこうしてるんだ……？）

自分にいくら問いかけても、答えが浮かんでこない。ただ、「逃げ

ている』という感じがした。
俺が走っていく先には、夕日が沈んでいく山々が見えていた。

・・・で、今はこういう状況なのである。

周りは真っ暗なので、時刻は真夜中。現在地はたぶん山の中。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こんな非現実的でバカな状況に陥ることがあるのか、と心の内で思い、現在進行形で陥ってるじゃないか自分、と心の中で再確認した。

「さて・・・・・・・・、また歩くか」

木刀を支えにして立ち上がり、再び前に歩き出す。

もう、歩くしかない。その先がどうなるうが、もう構わん。

てゆうかもう後ろに町見えないし、と思い、ふと不自然なことに気が付いた。

いくらなんでも、数時間走っただけでここまで遠くに來れるものか？

（山の中なんだろうけど・・・・・・・・でも、町の光が届かないなんて・・・・・・・・。どんだけ遠くまで來てるんだろう・・・・・・・・）

まあ、どうせ考えたところで戻れるわけじゃないし、それに・・・・・・・・戻れない。戻りたくない。

（女の子は俺のこと、どう思ったんだろうな・・・・・・・・。逃げたんだから、まず良い印象は持たなかっただろうなあ・・・・・・・・。でも、助けられたからいいかな・・・・・・・・）

いろいろな事を考えていたからだろうか。辺りがいつの間にか霧に包まれている事に気づけなかった。

(霧・・・ってことは、もうすぐ朝なのかな・・・)

さっきまでは辺りが真っ暗だったが、しだいにぼんやりと明るくなってきたる気がする。

霧にまぎれて何か出てきそうだな、とも考えた。まあ、何が出てこようがどうすることもできないんだろうが。

いっその事、熊でも出てきて食われてしまえば楽かなあ、とマイナスな考えまで浮かんできた。

・・・が、俺の前に姿を現した、というよりは出会ってしまった『ものは、俺が考えもしなかったものだった。

「痛っ！」

霧の中を歩いていると、突然何かにぶつかってしりもちをついてしまった。

鼻っ柱をおもいきりぶつけたため、地味に痛い・・・。

だが、前を向くと、そこには何も無かった。

「・・・？なんだったんだ・・・？」

鼻を押さえながら立ち上がり、再び前へ進もうとした。が、再び何かにぶつかった。

「なんだあ、こりゃ・・・」

そこには、何も見えない。だが、そこには確かに何かがあった。

ために木刀でつついてみた。何も見えないのに、木刀の先は何かに当たっている。

「??????」

何がなんだかさっぱり分からない。

なので、いろいろ調べてみた。どうやら、ここには「見えない壁」があり、壁の向こう側は見る事ができる(と言っても、霧で視界は悪いが)。この「見えない壁」は上や横に続いており、なんと土の

中まで続いていった。

結論から言えば、ここから先に進む事ができない。

「こんなところで行き止まりかよ……」

よくわからない気持ちになった。こういうのを、絶望と言うのだろうか。

「くそっ！」

やけくそ気味に見えない壁を殴りつけたが、拳に鈍い痛みを感じただけで、状況は変わらない。立て続けに蹴ってみても、結果は同じだった。

「……」

無意識に木刀を構えて、そこで動作を止める。一度人を殴った木刀を、もう一度振るうのに抵抗を覚えたからだ。

だが……、

「通して……くれよ……」

それは願いであり、嘆きであった。

そして、木刀を力強く握り締め、見えない壁に向かって振り下ろした。

……そして、今度こそ変化があった。

鈍い音がした後、ピキピキッ……とヒビが入るような音が聞こえ……

最後に、何かが砕け散る音がした。

「……え？」

さっきまで見えない壁があったところを木刀でつついてみるが、なんの感触も無い。

「えー……ウソだろ……？壊れたのか……？」

え……？だって木刀で殴っただけだよな？

道が開けた、と考えて良いんだろつか。これは。

若干の罪悪感を感じながら、再び歩き出すことにした。

霧の中を進んでいく。

疲労はとつくの昔に限界を超えていて、体中が鉄のように重い。

「ハア・・・ハア・・・」

自分がどこに向かっているのかわからない。このまま疲れ果てて倒れてしまったら、その後はどうすればいいのだろう。

（答えが欲しい・・・俺がどうなっちまうのか・・・その答えが・・・）

ふと、木々が生えていない、開けた部分が見えた。

今自分がいる、木々に覆われた薄暗い場所とは違い、朝になる前のほんのりとした明るさがこぼれている。

その光を求めるように足を進める。『答え』がそこにあるような気がしたから・・・

「ここは・・・」

そこは、言葉では表わせないような風景だった。

正しい表現なのかわからないが、なんとというか・・・感動した。

朝靄に覆われた山や自然、周りからくるやさしい明るさが目に映る。不思議な事に、俺の中から不安や迷いのようなものがなくなっていた。まるでこの場所に、この世界に、受け入れられたような気がした。

ふと、自分の周りを見ると、そこは小高い丘の上だった。

後ろを振り返ってみると、日が差し込まない暗い森と、その向こう

側に山が見える。

(さて……どうするかな)

前を向きなおし、とりあえず緩やかな斜面を降りていった。

「うう……」

呻きながら、少し靄がかかった土の道を進んでいく。

いくら不安や迷いがなくなっても、疲れは全くなくならなかった。

体力も気力も使い果たし、もはや何を原動力として体を動かしているのか分からない。

(やばい……これはどこかで休まないとやばい……)

さすがに道端に寝転がるのは気が引けるので、どこかに休めそうな場所が無いか探していると……

「鳥居……?」

まず目に入ってきたのは赤い柱だった。その柱を見上げると、横線二本と縦線二本が組み合わさったもの、神社とかにある「鳥居」だということが分かった。

長い年月が経ったのか、それとも単に掃除をしていないだけなのか、朱い鳥居の所々に汚れが目立つ。

「……境内で一休みさせてもらうかな」

鳥居を潜り、石段を登っていく。

鳥居の中央にある板には『博麗神社』と書かれていた。

不思議な名前の神社だな、と思いながら、残っているかどうか分からない力をふりしぼって石段を上がっていく。

……思ったより階段の数が多い……

石段の数はけっこうあった。下のほうにさっきの鳥居が小さく佇んでいる。

(こんなに石段が多くて……参拝客は来てんのか?)

心の中で文句を言いながら、ようやく最後の一段に足をかけた。

「の……登りきった……」
肩……というか、もはや全身で息をしている。

目の前には神社へと続く道と建物。

うん、ちよつと古い感じはするが、けっこう立派な神社だ。

とりあえず屋根の下で休ませてもらおうと建物に向かって一歩踏み出したとき……

「……あれ？」

目の前の景色が横になっている。

……いや、俺が横になっている。つまり、俺は倒れているらしい。

起き上がるために腕を動かそうとしたが、いくら力を入れてもピクリとも動かない。

しかも、だんだん視界が狭くなっていく。まぶたが閉じられようとしているのだ。

(ああ……、なんだろう……。死ぬのかなあ、俺……)

全身から力が抜けていき、俺の視界は完全に闇に埋め尽くされた。

完全にまぶたが閉じられる瞬間、一瞬だけ、人影が視界の端に映った気がした。

迷い込んだ少年（後書き）

第一話読んでいただいております。

詰め込みすぎました。スイマセン。

次回からはちゃんと東方キャラも出てきますし、もっとあっさり仕上げます。

えー・・・、一話を読んで、「あれ？なんか変だぞコレ」と思う部分がいくつかあったり、疑問に思う部分があったりしたと思います。

（博麗大結界に実体があったり、
なんで幻想郷に来てしまったのかだったり・・・）

大丈夫です！その疑問は後々ちゃんと解き明かされます。絶対。

次回からは、多分文の書き方が変わってしまうかもしれませんが。

絶対読みづらいと思いますが、これからもよろしくお願いします。

感想、要望、コメント、批評、バッシング、誤字脱字あるぞゴルア
などありましたらぜひ感想書き込んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7809x/>

東方迷繫記

2011年10月21日02時05分発行